



ノンフィクション作家
谷合 規子

作文講評

皆様からの作文を読ませていただいて

受賞された皆さま、本日は大変おめでとうございます。
心からお喜び申し上げます。

皆様の作品を審査させていただき、圧倒される内容に心打たれ、多くのことを学び、私自身が生きる力を頂いたことにあらためて感謝しております。審査員の一人として、大変おこがましいですが、若干感想を述べさせていただきます。
(2025年2月2日)

最優秀賞 前岡 光明さん 「爺からひ孫たちへ」

先ほど受賞者を代表して、ご自身に朗読して頂き、会場の皆さんと一緒に聞かせていただきました。ありがとうございました。

ムダのない構成と表現力に、圧倒されました。84歳というご年齢から、現役時代は、ことに当たっては真剣に、プロ的立場で文章をお書きになっていらっしゃる方と想像し、本日お会いできるのを楽しみにして参りました。

先ほど、お聞きしましたところ、現役時代はダム建設の技術者としてご活躍したエンジニアで、今は宇宙の問題にのめり込み、毎日執筆を続けていらっしゃるのとこのことで、精緻な文章の理由がわかりました。

エールを送った相手のひ孫は、一郎、二郎、三郎、四郎、五郎と全員が男子で、女子が入っていたらさらに話題も世界も豊かに広がったのではと思ったことでした。

審査員特別賞 今糠流さん 「死んだ心のまま生きる」

自閉症児としていじめを受け、苦しみ、成人した今もそれをひきずり、自閉症患者として精神科医に通っていらっしゃるとのこと。当事者として、苦しい体験から絞り出すようにして、作文を書き上げていただいたわけですが、どれほどの勇気を要したことかと想像し、感謝申し上げます。

それだけに、今まで生き延びてきた経歴には説得力があります。「だれでも良い。世界に一人はSOSをだせる人はいるはず。あなたにはそういう人になって欲しい」と訴えます。

本コンクールは、作文を読むだけでは済まされない。読む者は書く人と一緒に、いじめを失くすために行動する人になることを請われています。

審査員特別賞 上野佳平さん 「戦死の悩みを手紙代筆で解消」

戦後80年。数々の戦争体験の中でも、いじめ自殺防止作文コンクールが触発し、産みだした作品ではなかったでしょうか。

89歳の上野さんは、戦時中、得意な作文で反戦を表現した罰として特攻隊に送られ、そこで、いつも幼い少年兵たちが殴られているのを目撃します。彼らは家族へ手紙を出すことも禁じられているため、内緒で代筆を引き受けます。

悩みごとを話せた少年兵はスッキリしたと喜んだようですが、いじめられる子は支える人が一人でもいれば、救われるというのは、特攻隊も今も変わりません。

命の大切さをこめた代筆が「戦死の考えを防止した」と上野さんは今になって、振り返っていますが、死を

美化した軍隊で、万一にも上官に気づかれないよう、その表現にはどれほど神経を使い、智慧を絞ったことかと想像いたします。

文章を書くことは、たとえどんな環境でも、命に直結した深層の心を引き出すエネルギーになり、上野さんの密かな戦死への抵抗を、歴史の中に埋めることなく、表面化できたことを心から嬉しく思います。

最優秀賞 ねこせ。 「いつかオレンジ色の風が吹く」

美しい詩のような言葉で書かれた高校生の作品です。切迫した訴えは純粹、ストレートで、読む人の心に響きます。

最優秀賞 兎 「死にたくなるほど頑張るな」

作者はトランスジェンダーで、医学的、法律的に救済の手が差し伸べられるようになったのは、2000年前後からなので、49歳の作者は人生の前半、全く周囲に理解もされず、守る手立てもなく、生きてきたことでしょう。

中学生になってスカートの制服を強制されたのは、いじめよりきつかったそうですが、心と体の性が一致しないトランスジェンダーは、若いころは外観上比較的目立ちませんが、2次性徴を迎えた年齢から顕著になり、周囲は理解を超えてきます。社会的にも特別な教育が必要なことが、認識されるようになり、文科省も特別な指示を全国の学校に出していますが、最近は裁判で新たな判例や立法措置がおこなわれ始めています。トランプ大統領がこれを認めず、世界的には、この先どうなっていくのか気になるところですが、本コンクールでも、この投稿をきっかけに、特別な研修の機会を設けても良いのではないのでしょうか？

審査員特別賞 風雲急児 「助けを求めても得られないと…」

93歳になる元高校教師が戦争直後、暴力が横行した学校の様子を書いてくださいました。

同僚の教師が生徒を厳しく折檻し、翌日その生徒は自殺しますが、学校は事実を明かしません。似たような二件の事例に直面して、あの時、中に割って入っていたら、少年の自殺は予防できたと無念がります。

戦争直後、軍隊の影をひきずった教師が蛮行していた日本の教育実態を明かした稀有な証言と思います。

優秀賞 タカヤマユウスケ 「黒板消しでたたいた結果」

33歳の岩淵さんが中学時代の事件を想起した作品。タカヤマさんは容姿や言動をクラス中からかわれ、母が買ってくれた筆箱をあざ笑われたことが許せず、相手を叩きのめしてしまいました。教室中が言葉を失い、教師がかけつけ、別室で聴取を受け、双方型通りの謝罪をして落ち着きましたが、事件を機にいじめがやんだのは、教師の指導に効果があったというより、タカヤマさんの反撃が強く、彼らと対等になったためと確信しています。

いじめっ子には立ち向かうべきと主張しながらも、加害者を報復した自身の克服法には、今も割り切れない苦しさ伝わってきて、いじめは勝っても負けても、心に傷を残すと教えられました。

優秀賞 かおりん 「言葉の力」

社会人4年目のこと。やりがいのある仕事を任されて喜んだものの先輩社員の暴言や理不尽な言動に傷つけられ、ついに倒れ、うつ病と診断されます。自殺未遂を起こしたあと、通院とカウンセリング、投薬でようやく落ち着きを取り戻し、久しぶりに家族で食卓を囲みます。母から優しい言葉をかけられ、自分は生きていても良い存在なのだ実感し、「ひどい言葉で人生を大きく変えられる人もいるし、暖かい言葉が命を助けることもある。言葉の力は大きい」と訴えます。

優秀賞 ねこ 「いま生きているあなたは偉い」

大学生の投稿者が、親にも先生にも相談できなかった小学生時代の壮絶ないじめを思い出します。いじめた奴らより幸せになりたいと猛勉強して、難関大学に合格し、今は友達も恋人もできて幸せ。いじめを受けたら、勉強に限らず、スポーツや趣味を極めて自分の価値を認めよと、呼びかけます。文章表現は巧みですが、いじめを克服して、いじめた人を見返すという意識が、いじめの連鎖にならないか、気になるところです。

優秀賞 J.K 「カウンセラーとのお縁」

中二の時に受けたいじめは、学校で、家庭で理解を示してもらえなかったが、30歳を過ぎて、保健室のカウンセラーに救われたと振り返り、子供にはそっと優しく寄り添ってくれる大人が必要と訴えます。

全作品を拝見しての感想。‘悪の凡庸さ’

20世紀最大の悪事。ヒトラーの下で、500万人のユダヤ人を虐殺した最重要戦犯アイヒマンが、裁判で証言した内容が戦後80年の今、注目されています。

ナチスの収容所から脱出して、アメリカに亡命したユダヤ人の思想家ハンナ・アーレント（1906～1975）が、アイヒマンの裁判を傍聴し、彼が「上部からの指示に従っただけ」とくりかえしたことに、衝撃を受けます。

学者として思索し、「世界最大の悪は平凡な人間が動機も信念も邪心も悪魔的な意図もなしに行うものであった」と結論づけ、組織の権威者の中で受け入れている陳腐な悪を‘悪の凡庸さ’と名付けました。ナチスを擁護するのかと、当時は反論が大きく、ハンナの主張は受け入れられませんでした。このところ様子が変わりました。

歴史的な悪事に比較すれば、小さなスケールで生じるいじめ・自殺の加害はさらに平凡で取るに足りない悪事と思います。今回入賞した作品は、戦時中の軍隊、終戦直後のスパルタ教育、学校・企業内のいじめや、自閉症、うつ病、トランスジェンダー等の弱さを抱えた当事者の声ばかりで、‘陳腐な悪’が居座る様子が活写されています。これらを克服するため、改めて、普通の人間が普通の判断をして、普通の社会や学校での営みを取り戻す努力が必要と痛感しました。

作品を読んでいる最中に、M子さんから悲鳴のようなラインが届きました。

Mさんは脳性まひで、体は不自由ですが、作文が得意で、本コンクールで入賞した方です。授賞式にはお母様に車いすを押されて、参加してくださいました。その時、名刺を交換して以来、何年もメールやラインでお付き合いをしています。

作文コンクールの入賞で自信を持った彼女はその後、初恋をします。生まれて初めて、母親の付き添いなしに、外出したことや、彼に心を奪われたこと、間もなく振られたことなど、この間の様子も伺っていたので、私はハラハラドキドキするばかりで、なんのコメントできずにいました。ところが、彼女はそれには負けず、その恋をテーマに小説を書きあげて、見事出版にこぎつけます。今や、彼女は小説家を目指して、つらいこと哀しいことに直面しても、高い目標を持って乗り越えています。

今回のラインには、子宮筋腫になり、手術をする必要はないといわれたもののひどい出血で、介助のおむつ交換が一層つらく、なんで私だけがこんな思いをしなければならないのでしょうか？ヘルパーさんは

良い人なんだけど、ケアマネさんの顔色をつい窺ってしまうとありました。

いじめは大多数の人と異なる部分がターゲットにされがちで、生まれた時から、四肢の発達・動きに障害があり、現代の医学ではどうにもならないM子さんが直面してきたいじめと苦しさは、健常者には想像もつかないもので、残念ながら代わってやれるものでもありません。彼女には精神力で克服してもらうしかありません。

私はラインで返信しました。

「おむつ交換の介助を受けるだけでも大変なところを、子宮筋腫の出血が加わり、どれほどつらいことでしょう。でもM子さん、あなたは何も悪いことをしたわけではありません。堂々とお世話を受けましょう。ヘルパーさんが良い人で本当に良かったです。ケアマネさんも専門家ですから、M子さんの体のことなど、しっかり勉強しているはずですよ。それでもM子さんにそんな思いをさせてしまうんですね。本人は気づいていないかもしれませんが、ここで考え方を考えてみませんか？ケアマネさんも人間です。この際、M子さんの方が努力してケアマネさんを好きになり、信頼できるようになれば、その心は必ず伝わります。ケアマネさんもM子さんが好きになって、信頼してくれます。私はM子さんが自分にまけない、心の強い人だということを良く知っています」と。

作文コンクールの入選で、彼女は小説家への夢を抱くようになり、人間として、一回りも二回りも大きく成長しています。

4日前の1月29日、厚生労働省と警察庁は2024年に自殺した全国の小中高生が過去最高と発表しました。主要七か国の10～19歳で、死因が一位で自殺なのは日本のみとのことで、私たちはこの問題に注視せざるをえません。

12回目になった本作文コンクールの持続が、よりよい社会への取り組みにつながっていると確信し、投稿してくださった皆様方と主催関係者に、審査員の一人として、感謝と敬意を申し上げ、今後もますますの発展をお祈りいたします。

2025年2月2日

谷合規子